

(2) ESDの視点に立った日常の実践

① 「福島議定書」、校内環境をよくすることへの取り組み

「福島議定書」は、福島県が温暖化防止のために節電や節水を呼びかけている活動です。児童会の「環境委員会」が、節電・節水を呼びかけるとともに、毎月の電気と水道の使用量をグラフ化して掲示して、変化がわかるようにしました。

学年ごとに節電節水を進めるための具体的なめあてを立て、毎週金曜日に環境委員の放送による呼びかけにより、自己評価でふりかえりを行っています。各学年のふりかえりを環境委員会が点数化して掲示し、達成状況の見える化に努めています。

また、職員室前の廊下には、環境委員が植えた鉢花とメッセージが廊下の中央に飾ってあります。

これは、廊下の正しい歩き方を実践してもらうための方法として実行したものです。友達が植えた花なので、走ってぶつかることのないよう気をつける児童の姿が見られ、廊下の歩行もよくなりました。



② エコキャップとプルタブの回収、ユネスコ「寺子屋募金」への参加

児童会では、「力の三本柱 協力・努力・全力 ～三つの力で もっとすばらしい白方小学校を築こう～」というスローガンのもとで活動しています。運営委員会のESDの視点に立った活動として、エコキャップとプルタブの回収、そして、ユネスコ「寺子屋募金」への参加があります。「地球のためにできることをやろう」「世界中の恵まれない子を救うために協力を呼びかけよう」という気持ちで活動を続けています。



第3学期始業式後には、運営委員会児童による「エコキャップは何のために集めるのか」を周知するための寸劇の発表を行いました。児童自らが工夫し、低学年にも目的を理解してもらうこと、そして、さらにたくさんの児童に協力をしてもらおうと考えた行動です。

③ 「給食の残食を少なくするために！」残食量調べ

児童会の「給食委員会」が中心となり、各学年の残食量を調べ、表にして配膳室の入り口に掲示してあります。給食量は計算して決められたものであり、自分たちの健康な体をつくるためのバランスの良い食事であることから、なるべく給食を残さないようにした方がよいと考えたからです。毎日の積み重ねで、自分たちの残食の量に関心を持ち、減らすための努力や工夫を行うようになりました。たとえば、2年生では、おかわりをする最初の児童が食べたい人の人数を確認し、残っている量が少ないときは人数分に等分してみんなが食べられるように配慮したり、人数が少ないときは自分が食べられる量と合わせて考えておかわりをしたりしています。

④ 白方サイエンスクラブ

「サイエンスクラブ」は、3年生以上の希望者で構成し、活動しています。主な活動内容は、ビオトープを本来の姿に戻すための活動や、理科についてみんなに興味を持ってもらうために朝の時間を使って「おもしろ理科便り」を放送することなどです。

本校のビオトープは、水の循環がうまくいかなかったこととザリガニのすみかとなっていたことにより、様々な生き物が生息できない状態になっていました。サイエンスクラブでは、「本来のビオトープに戻すためには何が必要か」を、外部講師の先生の協力も得ながらヤゴの生態について学んだり、ビオトープの環境整備をしたりする活動を進めています。



⑤ 全校生による愛校活動

本校の愛校活動は、年に3回（5月、7月、9月）行います。それぞれの活動には、目的があり、全校生で目的を共有し活動します。

あいこうさぎょう ふりかえりカード（1・2年）			
ねん なまえ			
5月9日（月）こうていの石ひろい・えだひろい			
めあて「うんどうかいにむけて、こうていをきれいにしよう。」			
☆ めあてができましたか？	はい	いいえ	
☆ すずんでしごとができましたか？	はい	いいえ	
☆ あとかたづけをできましたか？	はい	いいえ	

7月19日（火）			
めあて「1学期間お世話になった場所を、みんなできれいにしよう。」			
場所	すること		
☆ めあてができましたか？	はい	いいえ	
☆ きれいになりましたか？	はい	いいえ	
☆ あとかたづけをできましたか？	はい	いいえ	

9月5日（月）こうていの石ひろい・草むしり			
めあて「市体育祭に出場する5、6年生のために、校庭をみんなできれいにしよう。」			
☆ めあてができましたか？	はい	いいえ	
☆ すずんでしごとができましたか？	はい	いいえ	
☆ あとかたづけをできましたか？	はい	いいえ	

7月は、1学期間お世話になった校舎をきれいにするために、どこを（場所）どんなめあてでどう掃除するかを各学年で話し合って決め、実践しています。場所が重なってしまわないように、一覧表にして掲示し、上の学年は学校全体を見回して活動する内容を決めています。



⑥ 児童の姿から見える ESD

5, 6 年生の宿泊活動の野外炊飯の際には、家庭科の調理実習での経験を生かし、自ら環境に配慮するために工夫をする姿が見られました。具体的には、野菜の捨てる部分を少なくしようと切り方に気を付けたり、水を出しっ放しにせずためすぎをしたりする姿が見られました。また、焼きそばを作った鉄板は、油がたくさん付いているので古新聞で拭いてから洗うことですすぎで使う水が少なくて済みました。児童が学習で学んだことを実生活で実践する姿の表れだと考えます。



3 研究を振り返って（成果と課題）

（１）「ＥＳＤの視点に立った学習指導」への理解と日常的な実践に向けた授業づくりが進んだこと

- ① ＥＳＤを日常的に実践する場合、その内容がＥＳＤにかかわるものというだけでは、ＥＳＤの視点に立った学習指導とは言えない。児童が見出した課題と関連を持ち、それを解決するために役立つものである必要がある。ＥＳＤの視点に立った学習指導の第１段階として、まずは児童の「持続可能な社会づくりのための課題設定」が必要であり、そこに十分な時間をかけることが重要である。
- ② その単元でつくれるべき「教科等の本来の力」と「ＥＳＤで育む力」を合わせて「ＥＳＤの視点に立った新たな単元の目標」を設定して授業づくりを行うことにより、担任はＥＳＤカレンダーによる指導計画と合わせてＥＳＤと各教科等の関連を授業レベルでイメージし、日常的に実践できるようになった。また、その際「その授業（単元）本来のねらいを達成させる方策」と「ＥＳＤの力を育む方策」を絡めて考えることが、それら二つの方策が互いに補完しあい、互いの効果を高めていくことにつながることもわかってきた。
- ③ 「持続可能な社会づくりに関わる課題を見いだす」ためには、「持続可能な社会とはどのような社会なのか」ととらえる必要があり、そのために『最終報告書』に「持続可能な社会づくりの構成概念」が示された。本校でもこれをＥＳＤの授業づくりに生かし、具体的には「公開授業」の各授業案に示しているが、「ＥＳＤの視点に立った授業づくり」のために、これをどの段階でどのように生かしていくことが効果的なのか、今後の課題である。
- ④ ＥＳＤを日常的に実践するとき、その評価は実践する教科・領域等の学習を通して行われる。しかし、ＥＳＤで育む力はテスト等による数値評価では評価しにくく、様々な方法で評価を行う必要がある。児童のＥＳＤの学びを確かに見取り、担任の負担が少ない評価の方法はどのようなものか、さらに研究を進めていく必要がある。
- ⑤ 福島県でのユネスコスクール加盟校は少なく、ＥＳＤについてもまだまだ知られているとは言えない。昨年度自主公開した「ＥＳＤ研究発表会」や今回の「全国小中学校環境教育研究大会」等を通して、ＥＳＤの理念やこれからの学校教育との関わり、授業づくり等についての理解を広げることができた。

(2) 「白方フェスタ」や「ビデオレター制作と交流」を通して「白方小の E S D で育む 4 つの能力・態度」が身についたこと

- ① 白方フェスタでは想定する観客が、ビデオレター制作では想定する視聴者がいる。E S D の学習で調べた内容に関して、その想定する相手にどのようなメッセージを伝えたいのか、それはどのような表現方法を使えば伝えることができるのか等を担任等の指導のもとに考え、工夫する学習を通して、「白方小の E S D で育む 4 つの力」が身についた。特に、児童の相手意識と表現力やプレゼンテーション力が高まり、言語活動の充実にも資するものとなった。
- ② 福島 E S D コンソーシアムへの参加により、児童の I C T スキルだけではなく、メディアリテラシーや異文化交流への意欲が高まった。一方で、外国の学校と交流を行う場合、言葉の壁だけではなく、E S D への温度差やこの学習に求めているもの（ねらい）の相違等、学習がスムーズに進まない原因となるものが多いこともわかった。コーディネーターとなる方や組織との連絡・調整を密に行うとともに、こちらの意思表示を明確な言葉で伝えることが必要である。
- E S D の推進拠点として、児童の発表、新聞等による報道、本校ホームページへの積極的な掲載等により、児童の具体的な学習の姿や成果の形で E S D を広めることができた。

(3) 授業以外の場でも児童の活動が広がったこと

内容や写真は、「E S D の視点に立った日常の実践」（P 1 0 1 ～）参照

(4) E S D の多様な学習を通じて、環境・人権・異文化理解・防災・食育等と児童の学習の視点が広がったこと

◇ 参考文献

- (1) 「ユネスコスクールと持続発展教育（ESD）」
日本ユネスコ国内委員会（2012）
- (2) 「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究
〔最終報告書〕」 国立教育政策研究所（2012）
- (3) 「持続可能な開発のための教育（ESD）の更なる推進に向けて」
日本ユネスコ国内委員会小委員会ESD特別部会
- (4) 「ESDの視点を取り入れた学習指導で学力向上」
埼玉県立総合教育センター
- (5) 「ESD（持続可能な開発のための教育）推進の手引き（初版）」
文部科学省国際統括官付・日本ユネスコ国内委員会
- (7) 「ESD環境教育モデルプログラムガイドブック」 環境省
- (8) 「ESD環境教育モデルプログラムガイドブック②」 環境省
- (9) 「ESD環境教育モデルプログラムガイドブック③」 環境省
- (10) 「持続可能性の教育－新たなビジョンへー」 教育出版
- (11) 「よくわかる環境教育」 ミネルヴァ書房
- (12) 「ESDをふまえた環境教育推進ガイドブック＜学習モデル集＞」
神奈川県総合教育センター
- (13) 「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開」 文部科学省

研 究 に 携 わ っ た 教 職 員

校長	内山 博行	教頭	善方 威浩
教諭	笹島 明美（教務主任）		
教諭	相楽 佳代（1年）	教諭	滝田美智代（2年）
教諭	久保田淑恵（3年）	教諭	吉田 貴子（4年）
教諭	富田優美子（5年）	教諭	福本 拓人（6年）
講師	松井 恵（なかよし学級）	養護教諭	安齋 節子
主査	佐藤 広行	主任栄養技師	矢吹真由美
用務員	円谷 秀生	支援員	渡辺久美子

お わ り に

本校は2013年（平成25年）9月にユネスコスクールへの加盟が承認されました。ユネスコスクールは「持続可能な開発のための教育（E S D）」の推進拠点となります。

以来、わたしたちは、E S D先進校の実践を参考にさせていただきながら、平成26年度から研究を始め、本年度で3年目を迎えました。

その間、E S Dに関する研究会等への参加や実践発表、研究公開の開催にも取り組んできました。特に、昨年11月には、本校を会場に全国環境教育研究会主催の「第48回全国小中学校環境教育研究大会（福島大会）」が開催され、本校の授業を公開しました。この研究会には地区内からも多くの方々においでいただきました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

これらの研究会等を通していただいたご意見や明らかになった点は、今後のわたしたちの課題としてさらに研究を進め、ユネスコスクールのネットワークも活用しながら、解決を目指していきます。また、その成果をこれからも積極的に発信していきます。

さて、昨年12月21日、中央教育審議会でも次期学習指導要領の改訂に関する答申（以下『中教審答申』）が取りまとめられました。そこでは、学力向上を着実に図りつつ、新しい時代に求められる力の育成という次の段階に進もうとしている日本のカリキュラム改革は、国際的に高く評価され、世界をリードする役割を期待されているとした上で、特にE S Dの積極的な推進の必要性が示されました。

また、『中教審答申』では、同時に、「（現行の学習指導要領では）各教科等の縦割りを越えた指導改善の工夫が妨げられているのではないか、指導の目的が『何を知っているか』にとどまりがちであり、知っていることを活用して『何ができるようになるか』にまで発展していないのではないか」との指摘があることを示し、「これからの時代に求められる資質・能力については、情報活用能力や問題発見・解決能力、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力など、特定の教科等だけではなく、全ての教科等のつながりの中で育まれるものも多く指摘されている」として、E S Dを例に次のように述べています。

持続可能な開発のための教育（E S D）が目指すのも、教科等を越えた教育課程全体の取組を通じて、子供たち一人一人が、自然環境や地域の将来などを自らの課題として捉え、そうした課題の解決に向けて自分ができることを考え実践できるようにしていくことである。

今後もわたしたちは、E S Dの学びの内容と方法を生かしながら、E S Dの日常的な実践を通して、テーマに掲げた「地域に根ざし、持続可能な未来を切り拓く児童の育成」のために、継続的に研究を進めていきます。

今後とも、本校の研究に対する皆様のより一層のご理解と幅広い見地からのご批正を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成29年 1月

教頭 善 方 威 浩